

今週のメニュー

■トピックス

◇こども霞が関見学デーに出展

■随想

◇SDGs を自分ごとにするためには？

第4回 企業のSDGs取組事例（1）

上智大学地球環境学研究科教授 織 朱實

■トピックス

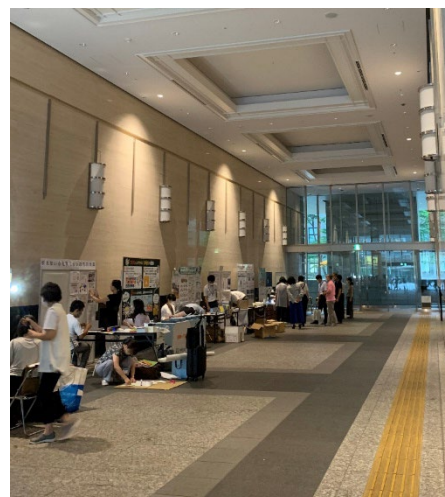
◇こども霞が関見学デーに出展

文部科学省「こども霞が関見学デー」が2022年8月3日(水)、4日(木)に開催され、塩ビ工業・環境協会（VEC）は、小・中学生向けにポリ塩化ビニル（PVC）の特長や環境特性について理解を広めるためパネル展示に出展しました。

「こども霞が関見学デー」は、関係省庁等が連携して、業務説明や省内見学などを行うことにより、親子の触れ合いを深め、子供たちが夏休みに広く社会を知る体験活動の機会とするとともに、関係省庁等の施策に対する理解を深めてもらうことを目的とした取組です。

文部科学省が主催するプログラムは、関連機関・企業・団体等が共催・協力して行われたイベントが約40あり、そのうちVECは「土曜学習応援団」のパネル展示に、6年ぶりに出展しました。「土曜学習応援団」は、2014年4月より子供たちの豊かな学びを支えることを目的に開始されました。土曜日のみならず、平日の授業や放課後、学校外で行われる教育活動に出前授業の講師派遣や、施設見学の受け入れ等を実施して、特色・魅力ある教育活動を推進しています。

パネル展示は、文部科学省2階共用ロビーで行われ、15団体が二日に分かれ、VECは4日に出展しました。パネルでは、今年制作した「塩ビとSDGs」のパンフレットを基にして4枚のA1サイズのポスターを展示。汎用プラスチックの一つであるPVCは丈夫で耐久性があり、リサイクル性にも優れている特長を活かして、私たちの生活を支え、社会に貢献していることを示しました。また、PCを用いて出前授業で行っているプラ

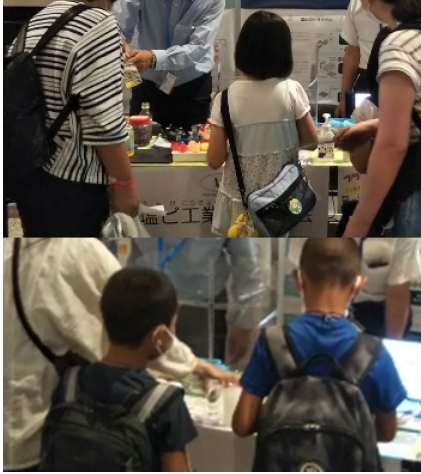


パネル展示会場の様子



VEC 展示ブースの様子

スチックの話や動画（塩ビってなんだろう）を紹介しました。



体験クイズの様子

パネル前のテーブルではパイプ、透明仕切り板、ホース、食品サンプル、壁紙、壁紙廃材を利用したブロックなどを展示し、硬いものから軟らかいものまで幅広く、加工性や着色性、リサイクル性などPVCの特徴について説明しました。となりでは、プラスチックの重さ比べ（密度の差）体験クイズを実施しました。直径5cm×長さ10cmの5種類のプラスチックのブロックを準備し（PVC、PP、PE、PET、アクリル樹脂）、手にもって重さを軽い順に並べる実験です。PPとPE、PVCとPETはどちらも10g程度しか変わらないため難しそうですが、子どもたちは手に取って順番を次々と見事に当てて並べていき、驚くばかりでした。保護者より子どもの方が早く当てる風景がよく見かけられました。正解者にはキャラクターコインケース（PVC製）を提供しました。

因みに、プラスチックの密度の差を利用したケースとして、電線の被覆材（PVCとPE）やPETボトル（PETとPE）のリサイクルの事例を紹介しました。混在したプラスチックを水に浮くものと沈むものに分離する見本を使いながら、密度差を利用したリサイクル工程について説明し、プラスチックの性質の違いや廃棄時に分別回収の大切さについて興味を持っていただきました。

VECのブースには約150人の来場者があり、記念品としてPVC製マスクケース（クリアケース）とパンフレット「塩ビって知ってる？」を全員に配布しました。B6サイズのクリアケースは透明性が高く、抗菌性で、マスクケースにもできるので好評でした。

土曜学習応援団のプログラムでは多くの参加者に様々な体験を楽しんでいただき、参加者の方から「とても楽しく学べました」、「子どもが積極的に参加しているのを見て感動しました」、「親子共々楽しい時間になりました」、「学校の授業等ではできない実験に驚きました」、「夏休みの宿題としてプラスチックについて調べてみよう」といった感想をいただきました。

PVCは、実はとても身近なもので私たちの生活を支えているため、今後とも子どもたちにその特徴や使用、リサイクルなどに興味を持っていただけるよう、こうした取り組みを進めてまいります。

◇SDGs を自分ごとにするためには？

第4回 企業のSDGs取組事例（1）

上智大学地球環境学研究科教授 織 朱實

前回まで、SDGsのポイント、企業がSDGsに取り組む際のポイントをご紹介しました。とはいえ、なかなか企業がSDGsを「自分ごとにする」のを実感するのは難しいと思います。今回は、色々なメディア、書籍などで取り上げられているSDGsに取り組んでいる企業の例をご紹介しながら、「自分ごとにする」ための工夫を見ていきたいと思えます。

1. 大和ハウス（建設業）の事例

まず、大和ハウスの取組を見ていきましょう。大和ハウスグループの基本理念は、「共に創る。共に生きる」。基本理念が、SDGsの目標「誰一人取り残さない」「世界はつながっている」と親和性があることもあり、SDGsへの取組が基本理念の実施につながりやすいということがわかります。大和ハウスのHPによると、企業の売り上げを確保しながら、事業活動に伴う温室効果ガス排出量を削減することが、2016年7月に宣言されています。これが、2055年を見据えた長期目標「Challenge 2055年」です。具体的には、創業100周年に売上高10兆円、同時に温室効果ガス排出量7割削減を達成する目標です。

この達成に向けて、温室効果ガス削減に関する国際的イニシアチブ「SBT（Science Based Targets）」認定を2018年に取得しています。エネルギー効率の向上、再生エネルギーの活用が必要であることから、さらに国際イニシアチブEP100（Energy Productivity）とRE100（Renewable Energy）へも参加しています。こうした取組は、自社で蓄積された省エネ、蓄エネの技術をいかした住宅、建築からスマートシティ、街づくりに活用する、「点から面への」経営戦略でもあり、またかつて手掛けた「まち」を再耕するものであるということです。こうした「まち」を元通りに再生するのではなく、新たな「まち」の魅力を創るアプローチであることが、財界オンラインのインタビューでトップが明確に述べています（<https://www.zaikai.jp/articles/detail/1070>）。

関連SDGs目標としては、7「エネルギーをみんなに、そしてクリーンに」、9「産業と技術革新の基盤をつくろう」、11「住み続けられるまちづくりを」、12「つくる責任、つかう責任」、13「気候変動に具体的な対策を」があるでしょう。これらの目標をどう企業経営に取り組んでいくか、目標相互間の関係をどう企業経営に取り入れていくのかを、自社の長期目標、国際イニシアチブへの参加などにより、見える化しています。

このように大和ハウスの取組事例では、企業経営と環境の両立を目指していることが、明言されている点が目を引きます。SDGsの取組を行っている企業の多くは、まずSDGs目標の実施を掲げ、それが企業の収益にどのように関連していくのかについては検討されている企業は多くありません。しかし、企業は、収益をあげていかなければならない組織です。収益をあげていくことが、SDGs目標達成につながるという関係性が見出されなければ、取組の持続は難しいでしょう。バブル時代に多くの企業が、企業メセナ（企業が資金を提供して、文化・芸術活動を支援）を実施したものの、長く続けられること

がなかったことは、その典型です。

「バックキャストिंग的アプローチ」が採用されている点も重要です。今の会社の状態ですることだけでなく、2055年を目標に戦略を立てることは、簡単なようでいてトップが音頭を取らないとなかなか実効性がある戦略となりません。さらに、国際認証を活用することにより、単なる宣伝でなく、科学的な根拠があることを証明している点、自社の取組過程で取得して省エネ等の技術を新たな商品開発へと展開。点から面へと展開していくという明確なコンセプトが打ち出されている点も、社員も参加しやすく株主の賛同も得られやすい取組となっています。得意分野を広げて、つなげていく、という発想が企業利益を確保しながら、SDGs 目標も達成するにつながっていきますね。

※SBT とは、ESG 投資において判断基準の一つとされる国際的イニシアチブ。

参考) ピーター D. ピーダーセン, 竹林 征雄 『SDGs ビジネス戦略-企業と社会が共発展を遂げるための指南書』日刊工業新聞社

2. 宮城県漁業共同組合志津川支所戸倉事務所（漁業）の取組

同じように国際認証を活用した取組としては、川延昌弘「未来をつくる道具わたしたちのSDGs」ナツメ出版（2020）で紹介されている宮城県漁業共同組合志津川支所の戸倉事務所カキ養殖事業（漁業）の取組事例があります。

震災前には、利益をあげるために「多く養殖すれば多くの利益が得られるだろう」という発想のもとで、過密化していたカキ養殖事業場では、通常1年の成長が3年もかかり、さらに身が小さいカキしか育たなくなるという悪循環に陥っていました。震災ですべてが流されたことを契機として、新たなカキの生育環境について、養殖事業者が協力しあいながら、カキの生育環境を保全しつつ美味しいカキを育てようという機運が高まっていたのです。思い切って養殖いかだを3分の1にすることにより、結果としてカキも大きくなり、労働時間も短縮されるという結果が生まれたのです。作業時間は1日12時間から6時間へ作業コストも取組前と比較して4割削減されていったとのことです。この取組にむけて、養殖事業者間での話し合いが何度も行われ、コミュニティが形成され、法令順守や環境整備に、メンバーが主体的に取り組むようになり、その後日本ではじめて持続可能な水産養殖に関するASCの漁業認証を取得したのです。ASC取得後の2019年には、農林水産部門で天皇杯も受賞しています。

※ASC 認証とは、水産養殖管理協議会（Aquaculture Stewardship Council）による環境や地域社会に配慮した養殖水産業が取得できる国際的認証

宮城県漁業共同組合志津川支所の戸倉事務所の取組変化（Change）は、まさにSDGs基本コンセプトを体現しているといえます。「収穫量を減らしてでも、養殖方法を根本から変えよう」、「現在の漁業スタイルを継続し、生産効率だけを追い求めていると生態系が崩壊してしまう」「海の持続性を確保しながら、養殖事業を行うためには、従来のやりかたを変える必要がある」、こうした危機感の下で仲間の連携、コミュニケーションが図られ、コミュニティが形成され、変化につながっていたとのこと。

ASC 認証を取得することで、定期的に第三者に見て評価してもらえるメリットのほか、ASCのHPによると、生産密度の見直し、飼育時期の短縮、品質向上に伴う価格の

向上、生産者としての意識の変化、研究機関との連携、労働条件の向上と労働時間の短縮、若い世代が生産現場に増加といった効果が見られるようになったということです（<https://jp.ASC-aqua.org/ssw21/local-farms/>）。国際的な認証を取得することにより、科学的な証明がなされるとともに、取組が見える化された効果は大きいようです。

参考) <https://rainbow.nttdocomo.co.jp/tohoku/know/0048.html>

<https://umisagozain.com/ASC/>

川延昌弘「未来をつくる道具わたしたちのSDGs」ナツメ出版（2020）

■ 関連リンク

- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)

※本メールマガジン上の文書・画像等の無断使用・転載を禁止します。



■ 東京都中央区新川 1-4-1

■ TEL 03-3297-5601 ■ FAX 03-3297-5783

■ URL <https://www.vec.gr.jp> ■ E-MAIL info@vec.gr.jp